世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The Management Factors which Influence Subjective Effect of the Reading Club Participants : A Focus Group Interview Study on Social Workers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂入, 竜治, 浅沼, 靖智 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/576

読書会への参加がもたらす主観的効果と効果に影響を与える運営上の要素に関する研究

―ソーシャルワーカーを対象としたフォーカス・グループ・インタビューより―

The Management Factors which Influence Subjective Effect of the Reading Club Participants – A Focus Group Interview Study on Social Workers –

坂　入　竜　治*
SAKAIRI, Ryuji

浅　沼　靖　智**
ASANUMA, Yasutomo

Ⅰ　はじめに

1．問題の所在

筆者は大学教員になる以前、精神科病院にて、精神疾患を抱えるクライエントに対するソーシャルワークを実践していた。クライエント１人ひとりの個別性の高い生活課題に対し、専門的なかかわりを基盤に支援を展開するソーシャルワークは、予め決められた定式があるわけではなく、クライエントを取り巻く状況に応じた柔軟な支援がその都度求められる。このようなソーシャルワークの特質は、ソーシャルワーカーに「この支援で良かったのだろうか？」と迷いや悩みをもたらすこととなり、自らの実践を省察する力の涵養に努めることが必要となる。

筆者は、職能団体が主催する研修やスーパービジョンを受けるなど、ソーシャルワーカーとしての力量を高めることに関心を持ち、幸いにも当時の職場や私自身の生活も自己研鑽に努めることを可能にさせてくれる状況下にあった。一方で、周囲を見渡すと、職場環境や家庭の事情、指導者的立場の人の不在などの諸要因により、自己研鑽の意識はあってもそれが実現しにくい状況にある仲間を数多く見てきた。どのような状況下にあっても、容易に自己研鑽を積める環境が必要ではないかとの問題意識が芽生え、筆者は対人援助に関する書籍（以下、専門書）を通じて自らの実践を振り返る読書会を立ち上げることとなった。

2013 年 6 月に立ち上げた読書会は現在、参加者も固定化し、運営上安定期に入っている。そこで、この読書会を参加者にとってより効果のある活動へ発展させるために、読書会の運営に関する研究を行うこととした。本稿では、この研究において明らかになった読書会

*人間科学研究所研究員／人間科学部人間科学科　** 川越市社会福祉協議会

参加者が感じている効果（以下､主観的効果）と運営上の効果的な特徴（以下､効果的要素）について報告することを目的とする。

２．先行研究調査からみる本研究の意義

筆者らの読書会について研究する前に、わが国における読書会の運営に関する先行研究調査を行った。CiNii（国立情報学研究所　論文情報ナビゲータ http://ci.nii.ac.jp/）を活用し､「読書会、社会福祉、ソーシャルワーク、ソーシャルワーカー」のキーワードを組み合わせて検索したが､結果は１件だった。そこでキーワードを､「読書、運営、社会福祉、ソーシャルワーク、ソーシャルワーカー」に変更し、再度検索を行った。（表１参照）。

表１　先行研究の検索結果（2015 年 7 月 28 日時点）

キーワード	検索結果（件）
読書会　社会福祉	1
読書　社会福祉	20
読書　ソーシャルワーク	1
読書　ソーシャルワーカー	2
読書　運営	84

検索の結果、その大半は書籍の紹介や子どもを対象とした読書指導、読書習慣に関するものであった。

学校図書の立場から学校における読書会運営について論じたものとして庄司（1965）と松波（1973）がある。これらの論文は、主に教員が中心となって教育の一環として読書会が位置づけられていることが特徴である。生徒への意識の啓発や実際の運営の方法についての要点がまとめられている。

地域における読書会運営について論じたものとしては、橋本（1968）と吉田（2014）がある。民間の読書会の活動紹介や参加者が実感する効果、運営の方法について報告されている。

専門職人材育成に読書会を活用している報告としては、金子・酒井（2014）らの取り組みがある。看護管理職の会議に読書会を導入した効果について報告し、次世代のリーダー養成の場として読書会が活用されている。

このように、わが国では読書会という場がもたらす効果やそのための運営に関する研究は多くなく、特に対人援助領域での研究は非常に少ないことが明らかになった。この点からも、本研究で得られるソーシャルワーカーを対象とした読書会の効果や運営における知見は人材育成の観点から意義があると考える。

Ⅱ　読書会の概要

筆者らの読書会に関する詳細な活動紹介については別の機会に譲るとし、ここでは概要のみを報告する。

１．読書会の目的

目的は明文化されてはいないが、日々の実践を振り返るための手段として専門書を活用し、ソーシャルワーカーとして成長することを目指している。また、１人で専門書を読むよりも複数人で読むことで理解が深まるという認識のもとに開催されている。

２．参加者ならびに運営方法

当初の参加者は発起人である筆者の同僚や知人であるソーシャルワーカーを中心とした構成であった。これは、自身の実践を振り返る上で、ある程度顔なじみの方が参加の敷居を低く感じると考えたためである。現在は同僚や知人を介した参加者も増え、定期的な参加者は７名程度である。

読書会は月に１度、第２土曜日の夜に開催し、公共施設の会議室等を利用し、２時間程度で実施している。運営としては、事前に指定した範囲（1つの章、20 ～ 30 ページ程度）を読みこんだ上で参加し、読書会当日は全体の到達目標などはたてずに、各々が読んだ範囲で分からなかった部分や印象に残った部分などを自由に意見交換し、対話する方法を続けている。読書会終了時には、参加者が１人ずつ、今日自分が感じたこと、学んだことを話し、全員で共有している。司会は輪番で担当し、参加者は事前に配布資料等を作成する必要もないため、気楽に参加できることが特徴である。

これまで取り上げてきた専門書は以下の通りである（表２参照）。

表２　読書会で取り上げてきた専門書一覧（取り上げた順に掲載）

著者名（発行年）	書名	出版社名
F・P・バイステック（1996）	『ケースワークの原則』	誠信書房
奥川幸子（2007）	『身体知と言語』	中央法規
川村隆彦（2011）	『ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ』	中央法規
久保紘章・副田あけみ（2005）	『ソーシャルワークの実践モデル　心理社会的アプローチからナラティブまで』	川島書店

Ⅲ　調査の概要

１．調査目的

読書会の参加者がどのような主観的効果を得ているかを明らかにした上で、その主観的効果との関連が推察される運営上の効果的要素を探索することを目的として調査を実施した。この調査で得た知見は今後、筆者らが効果的な読書会を運営していく上での基礎資料となるものである。

２．調査対象・調査方法・倫理的配慮

継続的に読書会へ参加している７名のうち、調査実施者である筆者らを除いた５名を対象に 2015 年 11 月にフォーカス・グループ・インタビュー（以下、FGI）を実施した（表３参照）。FGI は関係者の「なまの声」や潜在的な情報を把握するために有効な方法とされている（安梅 2001：3）。インタビュー時間は２時間 47 分であった。

調査対象者には文書にて①インタビューの方法・内容に関する事項、②倫理的配慮に関する事項、③研究成果の発表に関する事項、④謝礼に関する事項、について説明し同意書を得た。

質問項目は、①読書会参加の経験から実感する効果について、②効果を踏まえた上で読書会の運営における効果的な要素について、とした。

分析方法は、佐藤（2008：91 - 108）の方法を参考に質的データ分析を行った。まず、得られた質的データから逐語録を作成した。その際に、発言者と発言の順番が分かるよう通し番号を付した（例えば、A 氏の 1 番目の発言には A-1、2 番目の発言には A-2 と番号を付した)。次に、質問項目に沿って、重要な内容である「発言」を抽出し、帰納的にコーディングを行った。そして､抽出した｢発言｣を類似した意味内容ごとにまとめ､カテゴリー名をつけ検討した｡主観的効果や効果的要素と位置付けるカテゴリーの絞り込みは､グループの共通性に留意して、発言者が 3 人以上であることを基準とした。なお、分析には質的データ分析ソフトである「MAXQDA 11」を使用した。このソフトを使用する理由は､コーディング、コード付きセグメントの検索と表示、元の質的データとコード付きセグメントの同一画面での表示、コードの追加・変更、などの分析作業を効率的に進めることができるインタラクティブ性と柔軟性に優れているためである（佐藤 2008：47-54)。

表３　インタビュー対象者の属性

	性別	年齢	経験年数	職域や種別	立場
A氏	男性	40 代前半	８年目	路上生活者支援・生活保護施設等	指導職
B氏	男性	20 代後半	７年目	福祉用具貸与事業所	一般職
C氏	男性	30 代後半	13年目	就労継続支援 B 型・就労移行支援事業	管理職
D氏	男性	30 代後半	13年目	精神科病院	一般職
E氏	女性	30 代前半	３年目	社会福祉協議会	一般職

Ⅳ　調査結果

１．主観的効果の調査結果

質的データ分析の結果、主観的効果と示唆される総発言数は 34 であったが、発言者が 3 人以上である基準に従い採用したカテゴリーは表 4 の通りである。以下、発言数の多い順に示す。

表４　主観的効果と発言数

カテゴリー名	発言数
視点や価値観の広がり	10
業務や実践への応用	6
理論と実践の統合の試み	6
専門職アイデンティティの再確認	4

（1）【視点や価値観の広がり】

「文献を読むことも大事ですけど、それに基づく話し合いの中で自分の考えや視野に刺激を受けて、そちらに面白みがかなりあるのかな。…中略…自分の解釈が再構成されることで広がりとか出てくる（A-6）。」、「本を読んできて、ここでみんなの意見を聞いて、自分はちょっと引っかかるところが浅いなというか。…中略…いろんな人がいろんな部分に引っかかっているので。そういった部分をちょっと意識するようになる（B-7）。」、「解釈、違う見方とか視点とかを入れられるかどうかは結構大きいと思っている。同じような考え方の人たちばかり集まると、同じベクトルになってしまうので（C-13）。」、等の発言から抽出されたカテゴリーである。

同じ専門書を読んできても、自分とは異なる解釈をする人の存在や、自分が引っかからなかった部分に引っかかる人の存在がいることで、多様な考え、意見に触れ、自分の視点や価値観が広がる効果が示唆された。

（2）【業務や実践への応用】

「学んだことが実践で活かせるという実感があったんですよね、翌日から。…中略…周りにすぐフィードバックが返せたりしたので（C-7）。」、「いろんな人がいろんな部分に引っかかっている。意識して、業務とかでも、もう少し深く読み取ろうと意識するようになった（B-7）。」、等の発言から抽出されたカテゴリーである。

専門書で学ぶ知識のほか、読書会という場で他者の意見から気づいたことも踏まえて、翌日から自分の実践現場に活かそうとする意識が高まる効果が示唆された。

（3）【理論と実践の統合の試み】

このカテゴリーの抽出に至った代表的な発言は以下の通りである。

「文献を前面に持ってきて自分のやってきたことをふり返るという意味では、自分の中での棚卸しだったり、自分の実践でやっていた意味というものについてもう一回文献と照らし合わせていきながら紐解いていく作業はすごく有益（A-3）。」、「少なからず自分の実践が少し整理できたかなと。…中略…D（注：発言者本人の名前）っていう者だけで感覚的にやっていた部分も多かったし。今までこういう経験をしたからこの方法でやれば失敗しないなとか、でもそれは知識とかに裏付けされていた部分もあるかもしれないし、結構曖昧なものが多かったので（D-6）。」。

これらの発言から参加者は、実践現場で感覚的、経験的に実践してきたものを、専門書の知識（理念、原則、理論など）と照らし合わせることで実践の意味、根拠を再定義できる手ごたえを効果として感じている。

（4）【専門職アイデンティティの再確認】

「ここに参加することで有資格者である自分を保つみたいな。ともすれば、世間一般の人の感覚が強い自分を何とか鼓舞していたような感じがあった（E-7）。」、「有資格者っていう意識があまり持ててなかったのかな。資格を持って何を専門に見る力を養えばいいのか…中略…職業人としての私をここで磨かせてもらっている（C-10）。」

これらの発言から、参加者は職場を離れ、読書会にくることで、自分が有資格者である

こと、ソーシャルワーカーであることを専門書の知識や参加者同士の対話のなかで再確認している。そして、意識を高めて現場へ戻ることができると実感している。

２．主観的効果の考察

今回のインタビューでは、【視点や価値観の広がり】、【業務や実践への応用】、【理論と実践の統合の試み】、【専門職アイデンティティの再確認】の４つのカテゴリーが抽出された。

同じ専門書を読んでいても、実際に意見交換をすると、疑問を感じる箇所や話し合いたい箇所が異なることもあれば、同じ箇所についても意見が異なることが多い。それらの違いについて対話を重ねていくと、その背景には参加者が実践現場においてクライエントへの支援について悩んでいたり、組織のなかでの人材育成について考えていたりすることがある。つまり、現時点で参加者が何らかの悩みや迷いを抱えながら日々の実践にあたり、専門書を媒介にして省察した内容を読書会の場で言語化するプロセスが存在している。この言語化のプロセスを参加者が共有することで、個人で行う以上の集団による効果としての【視点や価値観の広がり】を得ているものと推察される。また､この言語化のプロセスは、専門書の知識（理念、原則、理論など）を自身の実践に引き付けて理解するという身体化のプロセスでもあるため、その行為は【理論と実践の統合の試み】であると捉えることができよう。そして、これらの行為を通じて得た学びを【業務や実践への応用】としてアウトプットしている。

筆者らの読書会の参加者がこれらの効果を得ていることには、属性の影響も大いに関係していると推察される。今回のインタビュー対象者は経験年数が 10 年前後のいわゆる中堅的立場にある人達である。豊富な実践経験を有しているが故に、専門書の知識と引き付ける経験の引き出しが多く、単なる専門書からの知識の吸収で終わることがないのではないだろうか。

また、参加者は【専門職アイデンティティの再確認】という効果を感じている。地域社会における読書会の効果について述べている吉田（2014）によれば、読書会には、①楽しい、②読むことが好きになる、③刺激がある、④大きな学びがある、⑤人間関係が築ける、といった効果が見いだせるとしている。これらの効果は、本研究で抽出したカテゴリーと共通するものもあるが、読書会に参加することで専門職のアイデンティティを再確認するという効果は含まれていない。

この点については、筆者らの読書会がソーシャルワーカーで構成されていること、対人援助に関する専門書を取り上げていることによる影響であると考えられる。

一方で、これらの主観的効果が抽出された背景を批判的に考察すれば、実践現場が多忙を極める状況にあると言えるのではないだろうか。自らがソーシャルワーク専門職であるという自覚が持ちにくい、自覚はあるが業務をこなすことで手一杯な環境で業務を展開すれば、ソーシャルワークの質（その行為はソーシャルワークなのか）にかかわる議論につながる。マニュアル的に業務が展開されれば、ソーシャルワーカーの視点や価値観は狭まり、多様化･複雑化するクライエントの生活課題に対応しきれなくなるであろう。そして、経験や勘のみに頼った支援が蔓延していくことにもつながりかねない。これらの状況は決してソーシャルワーカー個人に帰結されるものではなく、ソーシャルワーク教育やソー

シャルワーカーの社会的地位の観点から検証していく必要があると考える。このような背景を前提として調査結果を踏まえると、【理論と実践の統合の試み】が主観的効果として抽出されたことの意義は大きい。ソーシャルワークの価値や理念、理論に基づいて、根拠をもった支援が展開できる人材を養成する上で重要な取り組みとなるのではないだろうか。

３．運営における効果的要素の調査結果

質的データ分析の結果、運営における効果的要素と示唆される総発言数は 40 であったが、発言者が 3 人以上である基準に従い採用したカテゴリーを構造要因（表 5 参照）と参加者要因（表 6 参照）に分けて整理した。構造要因としては、発言数の多い順番に【システムの柔軟性】、【職場外での開催】、【選書の構造化】の 3 カテゴリーが抽出された。これらは、読書会への参加条件が厳格ではないなど、運営システムが柔軟であること、また開催場所、そして取り上げる専門書の順番などに関する発言から構成され、読書会の構造面にかかわる効果的な要素であった。また、参加者要因としては、【学びあう関係性による相互作用】、【受容的･協働的な雰囲気】、【参加者の主体性】の 3 カテゴリーが抽出された。これらは、参加者同士の読書会における関係性、発言しやすい読書会の雰囲気、そして参加者のモチベーションに関する発言から構成され、読書会の参加者の姿勢、あり方にかかわる要素であった。

表 5　運営における効果的な要素と発言数（構造要因）

カテゴリー名	発言数
システムの柔軟性	5
職場外での開催	4
選書の構造化	4

表 6　運営における効果的な要素と発言数（参加者要因）

カテゴリー名	発言数
学びあう関係性による相互作用	10
受容的・協働的な雰囲気	8
参加者の主体性	3

（1）【システムの柔軟性】

「間口がすごく広い。みんなウエルカムにしてても、参加者それぞれが求めている部分がマッチングの中でおのずと、限定かけてなくても出てくる（A-5）。」、「読書会はみんなで読んできたことに対しての確認ですかね。1 つのゴールに向かってではなく､各々が色々な視点、意見を聞いて学ぶ場と思う（B-10）。」、「いつでもきていいよ、いつでも抜けていいよっていうこのゆるさがものすごく大きいのかなと思う。安心感にもつながって。絶対参加しなきゃいけないと思うとプレッシャー（C-30）。」、等の発言から抽出されたカテゴリーである。

これらの発言から、①ゴールが参加者各自にゆだねられていること、②参加に対する条

件が厳しくないこと、がこの読書会の運営における効果的な要素であると示唆された。

（２）【職場外での開催】

「例えば会議や検討の場は、それぞれの組織の看板を背負っているので、自分の素の中での発言というよりは、職業人としての話し合いが多いと思う。読書会では仕事面での利害関係を置いて、自分がソーシャルワーカーとしてどう成長するかに対して純粋に入れる（A-11）。」、「職場でやると、彼はきてる、彼女は誘ってもこないとか、そういう弊害が出てきてためらわれる。ここは個々が自発的にきているっていうのが大前提（D-22）。」。

これらの発言より、職場外で開催することで、所属組織における立場や役割から解放され、一個人として参加し、自由に発言できることが参加者の学びに効果的であると示唆された。

（３）【選書の構造化】

このカテゴリーの抽出に至った代表的な発言は以下の通りである。

「本を選ぶのも発起人が『これどうかな』って提案してくれて。あと、次の本が見えているっていうか、今やっていることが何に結びついていくのかが見えやすかった（C-7）。」、「バイステックとか、奥川先生の体系立てて書かれた部分とか、本のチョイスが良かった。あれで結構自分の立っている位置というか組織の中の１人として自分の実践が少し整理できたかな（D-6）。」。

どのような専門書を選んでもその本から知識を学ぶことは可能である。しかしながら、自身の実践を省察したり、同僚や部下などに学んだことを還元することができる専門書が効果的であると示唆された。また、学んだ知識を体系化するには、読む専門書の順番なども考慮することが効果的であると参加者は実感している。

（４）【学びあう関係性による相互作用】

「１人で勉強するよりも読書会を通して学んでいくことによって、それぞれが相互作用の中で刺激し合いながら、他者の経験も疑似的に受け取ることができるのですごく勉強になっている（A-3）。」、「この本、あのこと（実践）を言っていたのかなって気づく部分は、多分１人で読んでも出てこなかったと思う（D-5）。」、「胸を貸してもらった感があり、心強かった。先輩の立場から言ってくれるし、自分の未熟さに気付くことがありましたね（E-19）。」。

これらの発言より、参加者はこの読書会において、教示的な関係性ではなく、参加者同士がお互いの発言の背景にあるこれまでの実践経験や取り巻く環境、そして専門書への解釈から学びあう姿勢を大切にしていることが見えてくる。この関係性はルールが先にあったわけではなく、活動継続のなかで生まれた規範であり、参加者はこの関係性が学びに有効だと実感している。

（５）【受容的・協働的な雰囲気】

「自分みたいな知識がそんなに及ばない人間が参加しても、批判的な返しとかもない。言ったことに対して受け入れてくれるというか、そういう雰囲気で続けられていると思う

(B-5)。」、「自分がしゃべっても皆さん受け入れてくれる余裕があるというのはすごくありがたいなと思う。誰も否定しないですよね（C-4)。」、「自分が疑問に思っているところを投げ掛けることで、その疑問に対してみんなはどう考えるのかなっていう時間が持てるところはすごい魅力がある部分（A-6)。」、等の発言から抽出されたカテゴリーである。

この読書会では、発言の前提となる話しやすい雰囲気ができあがっている。他者の発言に対していきなり価値判断を持ち込まず、まず発言をしっかり聞いたうえで、自分の考えを伝えている。

（6）【参加者の主体性】

「**業務時間外に来ている。お金ももらえないのに来ているのは大きな違い（E-13)。」、「その人に備わっているオープンマインドの大きさが進めていく力としては大きいかな(C-37)。」**。

これらの発言から見えてくることは、この読書会の参加者が主体的であることである。主体的であるからこそ、事前に専門書を読み、考え、その上で参加するという運営が継続可能となる。

4．運営における効果的要素の考察

（1）構造要因の考察

構造要因として抽出された【システムの柔軟性】、【職場外での開催】、【選書の構造化】の 3 カテゴリーについて考察する。

まず、読書会の開催場所についてであるが、今回のインタビューでは、読書会を職場外で開催することが効果的であると示唆された。職場では言いづらいことも、職場外だから言えるといった、職場外開催の利点が浮かび上がった。田村（2015）はスーパービジョンの立場から、職場外スーパービジョンの効果について、職場への定着支援（早期離職の抑止)、自己の専門性に対する信頼や力量への自信の獲得、他の研鑽機会への参画の促進、職場改善、スーパーバイザーになることへの動機付けの向上等を挙げている。このことからも、自己研鑽としての読書会を職場外で開催することの意義を確認することができた。

また、運営においては、参加条件や運営方法が厳格ではなく柔軟であることにより継続して参加できていることが明らかになった。この点については、読書会が専門書を基盤に置いた運営のため、事例検討会やスーパービジョン等の自己研鑽の方法に比べて準備性や敷居が高くないことが関係していると推察される。仮に欠席が続いたとしても、自身で専門書を読み進めればよいという気楽さもあり、読書会から脱落する可能性が低いと言えるだろう。庄司（1965）は学校図書の立場から「できるだけ規約を簡素化し、窮屈な感じを与えない配慮が大切であり、逐次改正していく態度の方が持続性を保つ上から必要である」と述べていることからも、読書会の運営が柔軟であることは効果的であると考えられる。しかしながら、筆者らの読書会において、このような【システムの柔軟性】が機能しているのは、参加者同士が顔見知りであるという点や、お互いの付き合いの長さによる信頼や阿吽の呼吸といった好条件が重なっていることを考慮しなくてはならない。参加者を募集し、一から立ち上げるような読書会の運営においても【システムの柔軟性】が効果的であるかは今後の検証が必要となろう。

次に専門書の選書に関してだが、これについては参加者の属性を踏まえ、合意の上で選ぶことが重要であろう。当初は筆者が推薦する専門書を皮切りに始めていたが、現在では専門書を選ぶ話し合いの時間も設けている。なぜその専門書を薦めるのか、その理由が明確だと参加者は自分とその専門書をひきつけ、動機付けされる。庄司（1965）は「社会人の読書会の場合では、参加者の共通関心事に関係あり、しかも興味あるテキストを討議の上で選択することが可能」と述べていることからも、読書会の運営において選書の基準を定めておくことは重要である。また、選書において考慮すべき事項として、吉田（2014）は、対象者のレベルや目的に合致しているかどうか、理解するための知識や体験をもっているかどうかも重要と述べている。この点については、参加者の経験年数などを踏まえることに加えて、読書会の初期は読み解くのに高度な知識を必要とする専門書は避けることが望ましいであろう。今回のインタビューでは明確に抽出はされなかったが、以上のことから、ある程度専門書を読んでいる人の存在なり、体系的に紹介してくれる人の存在も効果的なのではないかと推察される。

（２）参加者要因の考察

続いて、参加者に関わる効果的要素について考察する。今回のインタビューでは、【学びあう関係性による相互作用】、【受容的・協働的な雰囲気】、【参加者の主体性】の３カテゴリーが抽出された。この３つのカテゴリーの関係性について考えてみたい。

そもそも職場外で開催している読書会へ、勤務時間外に参加するということは主体的でなければできないことである。また、読書会の当初から参加者が受容的であり、協働的な雰囲気が作られていた。このような参加者の主体性や読書会の雰囲気があるからこそ、発言がしやすく、誰かが誰かに教える教示的な関係性ではなく、お互いの発言から学びあう関係性を保つことができよう。先行研究（庄司 1965）においても、読書会の運営においては、読書会そのものが強制されたものではないことが重要であると述べられている。

筆者らの読書会の受容的な雰囲気や学びあう関係性というのは、参加者がソーシャルワーカーであるという職業柄もしくは中堅的立場や指導者的立場の人が多いといった属性による影響ではないかと考えられる。ソーシャルワーカーはクライエントの生活課題の解決において、パートナーシップの関係性を基盤に支援を展開する（公益社団法人日本精神保健福祉士協会「精神保健福祉士業務指針」作成委員会 2014：18）。パートナーシップの関係性を形成するためには、傾聴、受容、共感等の関係形成技法は必須であり、これらを意識して実践を行っている（公益社団法人日本精神保健福祉士協会「精神保健福祉士業務指針」作成委員会 2014：36）。このような背景から筆者らの読書会では、発言のルールを明文化することなく、運営上の効果的要素としてカテゴリーが抽出されたと推察される。

一方で、参加者の姿勢や参加者同士の関係性における効果的な要素は抽出されたが、読書会の場の相互作用を促進する集団力動に関する明確な要素は抽出されなかった。読書会を立ち上げた筆者としては、この点は重要と考えている。読書会の初期は司会を筆者が毎回担っていた。ある参加者の発言をもとに、必要に応じて筆者が別の参加者へ発言を促し、相互交流が活発になるように働きかけていた。現在では、役割が固定化しないよう、司会を輪番制にしているが、参加者によっては司会の役割を難しく感じることもあるようである。Toseland・Rivas（＝ 2003：77-84）はグループワークの立場から、集団力動におけ

る相互交流パターンの重要性について述べており、意思決定が求められる課題グループ（委員会や処遇会議など）を除いて、多くの状況ではリーダー中心の相互交流よりも、グループ中心の相互交流が望ましいとしている。これは、グループ中心型では、メンバー間のコミュニケーションチャンネルが開放されているのに対し、リーダー中心型では、メンバーが相互に自由にコミュニケーションをする機会が少なくなるからである。筆者らの読書会の今後の継続性を視野に入れると、司会のスキルの向上を図るとともに、集団力動の観点から読書会活動を再検証する必要もあるだろう。

Ⅴ　総合考察

ここでは、これまでの調査結果と考察を踏まえ、参加者の主観的効果と運営上の効果的要素との関連について仮説を提示する（図１参照）。なお、仮説は読書会のプロセスに沿って提示する。

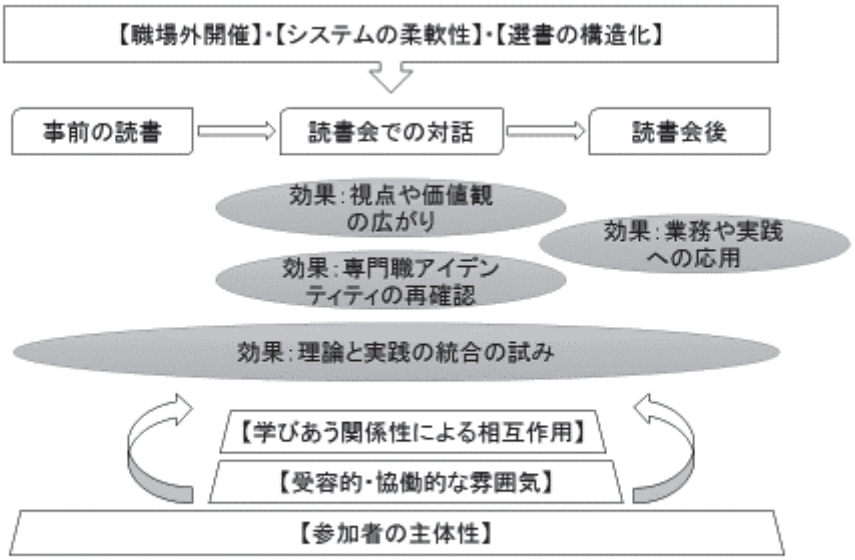


図１　主観的効果と運営上の効果的要素との関連（筆者作成）

１．事前の読書

主体的である参加者〔効果的要素〕は事前に専門書の指定された範囲の読み込みを行う。この作業は参加者各自のペースで進めることができる。専門書から知識（理念、原則、理論など）を学びながら、自身の実践体験を想起し、専門書の知識と照らし合わせながら解釈を行う。このプロセスは主観的効果【理論と実践の統合の試み】の始まりであり、読書会での対話を通じてさらに深化されていくであろう。

事前の読書の段階は、参加者が１人で行う作業である。専門書の知識（理念、原則、理論など）を基軸に自身の実践を省察する行為は、セルフ・スーパービジョンと捉えることもできよう。スーパービジョンとは、一般的に所属組織内の同一専門職の間で行われる専門職としての成長をめざすための支援体制であるが（福山 2005：198）、わが国では組織内のスーパーバイザーが不足していることから所属組織外で研修等を通じてスーパービ

ジョンが提供されている現状がある（植田 2005:64)。セルフ･スーパービジョンは、スーパービジョンの一形態であり、自分１人で業務や援助の点検を行う確認作業である（福山 2005：203)。読書会の参加者自身がセルフ・スーパービジョンと意識して行っているかは議論の残る点ではあるが、筆者らの読書会をさらに発展させ、普及していくことを視野に入れた際には、仮説の理論化としてセルフ・スーパービジョンの概念を援用することができるのではないかと考える。

２．読書会での対話

主体的である参加者〔効果的要素〕は、読書会において受容的・協働的な雰囲気〔効果的要素〕のもと、学びあう関係性による相互作用〔効果的要素〕を意識した対話を行う。職場外での開催〔効果的要素〕やシステムの柔軟性〔効果的要素〕も相まって、参加者は専門書から得た知識を確認するだけでなく、実践体験をもとにした解釈を言語化しあうことで、主観的効果【視点や価値観の広がり】･【専門職アイデンティティの再確認】を得る。さらに、事前の読書において取り組み始めた主観的効果【理論と実践の統合の試み】を読書会での対話を通じてさらに促進させていく。

読書会での対話の段階では、１人で行う事前の読書の段階で省察した内容を、集団の場で言語化しあう作業となる。すなわち、個人から集団へと学びの形式が変化していく。前述したように、今回の調査では読書会の場の相互作用を促進する集団力動に関する要素は抽出されなかったが、グループワークでは古くから個人と集団の関わりの重要性が指摘されてきた。個人の人格形成、態度や価値観の形成においては、その個人がどのような集団に所属し、影響を受けたかが重要な意味を持つ（野村 1999：3)。今後はグループワークにおける集団力動の諸条件を精査することで、筆者らの読書会における対話の段階が重要な意味を持つことを理論化していく必要があろう。

３．読書会後

事前の読書、読書会での対話を通じて得た知識や気づき、意識の高まりをもとに、参加者はそれぞれの現場で、主観的効果【業務や実践への応用】を試みる。自身の実践のみならず､所属組織における人材育成や組織改革にも貢献していく。選書の構造化〔効果的要素〕により知識は体系化され、参加者同士の共通言語が増えていく。さらに主観的効果【理論と実践の統合の試み】も促進されていくと考える。

読書会後の段階では、集団から個人へと学びの形式が変化していくが、当初の事前の読書の段階に比べ、省察の幅が広がり、再び現場の業務や実践に戻りながらセルフ･スーパービジョンを継続していく学びの循環が生まれていると考えられる。

Ⅵ　おわりに

本研究では、筆者らの読書会参加者が実感する主観的効果とその効果を導く運営上の効果的要素を明らかにし、主観的効果と効果的要素との関連性について仮説を提示した。主観的効果を導く運営上の効果的な要素には、構造要因と参加者要因が存在することが明らかになり、特に、読書会の構造面に留まらず参加者の姿勢や参加者同士の関係性における

効果的な要素が抽出されたことは読書会の運営に関する研究上、意義がある。

一方、本研究にはいくつかの限界がある。まず、調査方法についてであるが、この調査が筆者らの読書会参加者を対象にして筆者らが調査、分析をしている点である。読書会の主観的効果や運営上の効果的要素を抽出する調査においては、筆者ら以外の読書会に対しても調査を実施することや、筆者らの読書会においても複数のグループでFGIを実施することが望ましい。

次に、分析についてであるが、分析は筆者ら2人で行ったものの、筆者らの主観が調査結果に影響を与えていないとは言い切れない限界がある。その意味では、この調査で得た知見は、筆者らの読書会において現段階で提示できるものであり、一般化するには、この活動を継続しながら仮説を検証し、課題を抽出していく等の更なる研究が求められる。

また、効果的要素として抽出された読書会システムの柔軟性や参加者同士の関係性は、筆者らの読書会参加者が中堅的・指導者的立場である人達だからこそ運営が滞りなく推進するものであり、参加者層が変化すれば効果的要素も変化する可能性は否定できない。その意味においては、筆者らの読書会は中堅層向けのモデルと言えるのではないだろうか。

ソーシャルワーカーの自己研鑽の方法には、職能団体が主催する研修やスーパービジョン、卒業校での勉強会など様々な形態がある。ソーシャルワーカーのライフコースの観点に立てば、自己研鑽の方法は多様であることによって、どのような状況下に置いても地道に研鑽を重ねていくことができよう。

筆者らの読書会が多様な自己研鑽の方法の1つとなるよう、今後は普及も視野に入れ、モデルの理論化を図りながら改善を続けていきたい。

本稿は、第15回日本精神保健福祉士学会学術集会における、浅沼靖智・坂入竜治「読書会の活動における参加者への効果について」、坂入竜治・浅沼靖智「読書会の運営における効果的な要素と課題の抽出 - 参加者へのフォーカス・グループ・インタビューより - 」の2演題の報告を加筆・修正したものである。

最後に、業務多忙のなか、インタビューを快諾して下さった皆様に御礼申し上げる。

【引用文献】

安梅勅江（2001）『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法　科学的根拠に基づく質的研究法の展開』医歯薬出版.

福山和女編著（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン - 人の理解の探求 - 』ミネルヴァ書房.

橋本道淳（1968）「民間の読書グループの概況―YBC（読売ブック・クラブ）の組織・運営・活動―」『読書科学』11(4)，40 - 46.

金子八重子・酒井百合子（2014）「うちの師長会・主任会：学習する組織をめざして (2) 東京・社会福祉法人 三井記念病院 読書会形式の主任会を通じて―互いのマネジメントをピア・レビューし合い，“創造的な看護”を皆でめざす―」『看護管理』24(2)，107 - 113.

公益社団法人日本精神保健福祉士協会「精神保健福祉士業務指針」作成委員会（2014）『精神保健福祉士業務指針及び業務分類第2版』.

松波桂子（1973）「読書会のもち方の基準」『学校図書館』(277)，26 - 28.

野村武夫（1999）『はじめて学ぶグループワーク　援助のあり方とワーカーの役割』ミネルヴァ書房.

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法―原理・方法・実践―』新曜社.

庄司豊義（1965）「読書会運営の技術―その方法と問題点―」『学校図書館』(177)，13 - 19.

田村綾子（2015）「スーパービジョン・ニーズへの外部機関による実践とその課題―大学および専門職団

体による取り組みから―」『精神障害とリハビリテーション』19(1)，25‐30.
Toseland,R.W. and Rivas,R.F. (1998) *An Introduction to Group Work Practice*, Allyn & Bacon（= 2003，野村豊子監訳，福島喜代子・岩崎浩三・田中尚・鈴木孝子・福田俊子訳『グループワーク入門　あらゆる場で役に立つアイデアと活用法』中央法規.）
植田寿之（2005）『対人援助のスーパービジョン　よりよい援助関係を築くために』中央法規.
吉田新一郎（2014）「ブッククラブ（読書会）という読み方」『情報の科学と技術』64(10)，414‐419.